

私共の歩み

——長崎共同体—— 藤 田 満寿子



私共が歩き続けてゆくというのは一体どういう事なのだろうか。時々考える。私共は、もともとあるべき筈の人間の住む土地を見つけて歩いているのではないだろうか。

あそこは険しいし、此所は陰湿だし、あちらはからの風が吹き、こちらは無風地帯である、何処かに本当に生き生きと生きられる場所はないものかと。そこで、人間の住める場所を見つけて生きようと始めた若者達が、此所にその場所を定め選んだのだと私は思う。勿論充分ではない。或る時は冷たい風の侵害にあらされ、或る時は破れた屋根から雨も漏る。然し、若者達はくじけない。

確かに生きたら確かに認め合えるではないか。額に汗して汗が真珠をも生むという奇蹟を、時にして彼らは瞠目する。無形のもの信じられる時、人間は一番人間らしいのではないだろうか。つい最近、この農園で若者達のひらいた『フィールド・ワークキャンプ』の主旨を書いたプリントの一節を紹介しよう。

前略

—— 此所にサマーカーンプを開催する事は、本来人間がその一部であった自然について認識を新たにし、人間偏重の物

の見方をとり除いて、真の意味での自然と人間性を得ようとするものであります。元来仕事も遊戯も同一のものであり、頭を働かし肉体を動かす事は区別のつくものではありません。現在社会の中で失われつつある生活を何とか具現したいという願いが今回われわれの主旨であります。

このプリントを配布して十七人の子達をキャンプに収容した。一週間の生活学級は、まだまだその出発点に立って、向うにある山の頂きを見ているにすぎない。食事の支度、農園の草刈り、大豆の種まき、キャベツの植付け、鶏舎の網はり、水汲み等々。その間に、タイル張りのガス風呂しか知らなかった子達は、鉄釜の五門風呂を知り、薪を作って炊事をする事から、川の流れて魚を釣ること、キャンプのはり方等を自分なりに知り、共同作業を行う時に先ず相手に対するおもんばかりがどんなに大切であるかを知らされたにちがいない。自分だけがお腹一杯になる前に隣りの子が足りているかを心配し、一番先に風呂にはいる者は、おしまいの子がはいる時水が汚れていないように注意する事を覚えた

にちがいない。

そこにこそ、人が生きてゆく基本の道義がかたちづくられてゆくのだと私共は考える。草むらには虫族が生活し、樹々の間に小鳥の一家が巣を作り、それらはちゃんとそれなりの形で生きているのだと子供らに教えた筈である。農園には五匹の犬と山羊と六羽のアヒル、それにチャボの夫婦、鶏は四十羽を放し飼いなので、まさしく雑居家族である。或る時は鳥になり、或る時は魚になり、或る時は犬になった子供らの姿は、私共の設定した大自然のスクリーンの中で実に生き生きとのびやかに泳いでいるのだけれど、現実にはどうしてどうして大変な事で、それが十分に成しとげられる迄には、彼ら自身の今までの作りあげられた生活がい念を先ず叩き破らねばならず、その為には時間が必要のようであった。唯おもしろい事に、その成果が確実に見え始めたのは、やはり一番年少者の子供達からであり、幼ければ幼い程、彼らは感能を深くし、キャンプ生活最後の日のピクニックに、往復十四キロの道程を一人の落伍者もなく終了した。

ここで、もう一度本論にかえると、前に書いたように額の汗が真珠のタマになるとい

奇蹟の一つであった。この事が、若者達の自信を深め希望と勇気を倍加させてくれなかったとして云えよう。ピクニックに参加した者の中で、若輩は九才からであった。若者達は、朝から次の朝まで、子供らを守らねばならぬ大変な労苦を、その成果によって忘れたにちがいない。そこで彼らが学んだ事は、愛されるという事より、愛するという事がどんなに大変な事であり、然も、どんなに素晴らしい事であるかということではなかったらうか。農園は、社会福祉の願いを持つ一人の人の好意によって若者達にあずけられた土地であり、私達の本拠である藤田外科医院の所在地から約一時間を車で走らねばならぬ所にあり、農耕していないこの若者達は、自分の仕事が終わってからそこへ駆けつけて一緒にミーティングに参加した。彼らの帰宅はいつも深夜一時頃であり、仲間である留守宅の私にもさすがに疲れた。

月が照り、星屑の光る夜々、子供達も、指導にあたる若者達も、そして家を守る私達、それに子供らを手離して、その幼い歩みの向うところを遠い場所から真剣にみているなければならぬその両親達も、祈るところは一つであり、祈り願う事によって、皆ひとつの目的

につながれて生きた一週間であった。即ち、それがコミュニケーションと呼ぶものであると私は思う。

つい最近、看護婦募集要項をしたためたプリントを刷って、その一部を喫茶部門である『からやん』にも置いたところ、過日毎日新聞の記者だという男から電話がきた。「お宅は、特別に何か思想的なものでありませんか？ 例えば、まあ民医連などというのにはいりであるとか——」「どういう事なのでしょう。民医連って何なのですか？ 私らには特別な色彩の思想など何一つありません。強いて云えば、本当に生きている人間が欲しいし、本当にいきいきと生きてゆきたいというのが思想とでもいえますかね」と答えた。それでも納得ゆかぬ様子なので「うちに出入らっしゃい。そして、いっしょけんめいな若い者達に力でもかしてやって下さいよ」と云ったら、慌てて電話は切れた。自分の物や心を与える事は金輪さしくなくせに、つつきまわして何を探そうというのだろう。

私の書いた看護婦募集の要旨は、献身と奉仕の心を持つ人がほしいという意味あいの事で、その一番本当の事がうさん臭い眼でみられる世の中というのは、一体何なのだろうか。

そんな風に、眼も耳も鼻も確かな感覚を失くしてしまっている者が、社会の重要なポストに立って社会を見ているというのは怖い事であると思う。何だかひどく理屈っぽい文章になってしまったが、皆が皆こんな風にカチカチと生真面目に時を刻んで動いているという事でもなく、先に書いたキャンプの主旨にあるように、本来あそびと仕事が同じ形で廻転し、同じく最大限のエネルギーに於て動いているものでありたいと願っているの、結構おもしろいエピソード等も加えて一日一日が明けて暮れる。

農園に四十羽の鶏がいるのはまずわかるとして、藤田外科部門には何時の間にかふえた猫族四十四匹、人間の数をはるかに上回る計算で、その中には、玄関の外で拾いあげた猫が三分の一の数である。これから頁をさいて頂ければ、私共人間と猫との深いかかわりについて面白い話を沢山書かせて頂き度いと思う動物と人間の不思議なコミュニケーションについてである。

看護婦さん募集

ユニークな長崎共同生活体の医療部門・藤田外科医院で看護婦さんを募集しています。現在、院長のほか若い医師二名、看護婦六名、他に検査技師の学校に通っている男子一名がそのメンバー。従来の企業化された病院でなく、本来あるところのホスピタル（優遇する心）の意味を実現しようとしている。資格がなくとも学校に行く意志があれば可。お問い合わせは左へ。

長崎市小ヶ倉町一―六四〇

千八五〇

藤田外科医院

藤田満寿子

電話 〇九五八―七八一五〇一

時代の脚光を浴びてきた

ヤマギシズム北海道試験場

毎年八月八日に開催されるヤマギシズム北海道試験場の、恒例の収穫祭に参加するものもこれで三回目、年と共に盛大さを加え、びつくりさせられた。

オホーツク海に面した、文字通りの一望千里の根釧原野は広い。この別海町だけでも本州の一県にも相当する面積であり、その開拓は緒についたばかり。それでも乳牛頭数六万頭に達し、それを象徴するように、中心地の中標津や西春別の市街地は急発展して、少々びつくりする近代都市の様相を呈している。

これは、一面、地方発展の立証でもあるが、商店大繁昌の裏側には農民搾取の罟が秘んでいる。西欧のどこに行っても見られない凶であることは、考えてみるべきであろう。

日本に残された唯一の牧野、農業開拓地である根釧原野は、何としても高等遊民や商魂階級の餌食にならない為に、農協幹部の一層の奮起を切望する。

何千ヘクタールの開拓農場、何百頭の牛や羊の群れは目につくが、一軒の商店も飲食店もないキブツ村を思うと、搾取や不労所得の大好きな日本ではあるが、その反省を忘れては本物の自主発展ができませんまい。

デンマークや西独の農村地帯の何処に行っても、立派な農協配給所が完備しており、良品原価配給を実施しているから、農村で商店は見当らない。もちろん、農協の購買部もしっかりしているが、農民自身も共同社会の自覚がなければ、ここまで徹底できないであろう。



元来、生産性の低い農業である。高給取りの餌食にされたり、商店の搾取に任せて成り立つわけがない。根釧原野の開発も、中心都市発展に役買っただけで

は、意義も使命も帳消しになるであろう。

搾取もない、不労所得もない、無所有一体化社会の実験場として、着々その成果を示している

ヤマギシズム北海道試験場急発展の意義は大きい。今が最も大切な上り坂である。年と共に隆々発展をみる好例の収穫祭は有名ともなっている。

全国から集まり

集まったり五百余人の青年男女

根釧原野といえば、オホーツク海に面した北辺の地、集まり集まったり五百十人、それがエネルギーあふれた青年男女ばかり、沖繩からも九州からも、農村からも都会からも、何を思い何を求めている集まりか、これだけの若者を引きつける磁力はどこにあるか、当局だって無関心ではいられなくなっている。

ヤマギシズム北海道試験場の存在意義を無視する政治家があるとすれば、時代感覚のずれた落伍者であろう。百万頭牧畜産計画を使命とする根釧原野を、

資本主義経済の餌食にしたなら、必ず失敗するであろう。

ヤマギシズムが嫌いでも、その共同一体化精神を軽視しては、新時代感覚に目覚めた青年男女は寄り付かない。青年の寄り付かない土地は、人生の墓地に等しい。

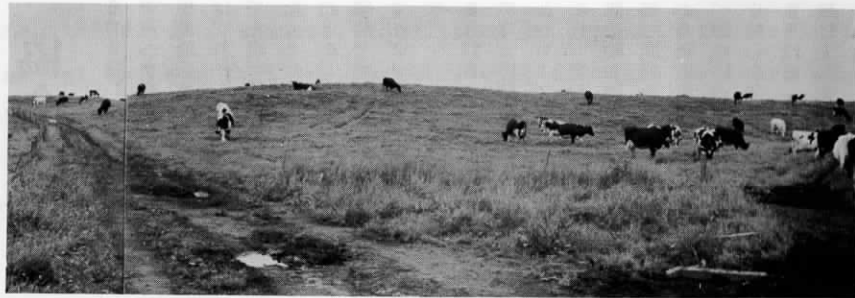
収穫祭に参加した同地方の個人農家の声は、一斉に、好きでも嫌いでも結局ヤマギシズムかと漏らしていた。お役人の頭の切り替えが出来ないから本音が吐けないだけか。

キブツ関係の若者十数名も参

加していた。これらの心境を推断すると、貨幣には若者の魂をつかむ力はない。利潤の追求が人生の目的であった時代は終わっている。日銀券の紙屑化必須の経済状況も、大人の頭脳よりはるかに高い感覚で知り尽くしている。

再び言う。新時代の青年男女五百余人を、無償で北海道の北端に集め得る力は、今のところ日本にはヤマギシズムしかない。改めて敬服するのみであった。さらに来年の収穫祭の発展が楽しみである。

てづか



協会日誌

8月3日 手塚さんが恒例の北海道へ出発。第12回キブツ研修生北海道支部選考会に、阿寒のはずれから、夜を徹してジープで札幌の選考会場へかけつけた、たくましい女性がいらっしやうたとか。女性ばかり5名が合格。帰路やマジズム北海道試験場でキブツ講演を行い、14日に帰京。

8月11日 イスラエルのアジア、アフリカ研究所の卒業生の会、シャローム会の総会が伊東でもたれ、奥村が参加。共済主義実践運動勉強会に畠中が出席。物価の問題をテーマに、物そのものの価値をみきわめ、どう使うべきかについて、数時間にわたる熱心な学習会がもたれた。

8月12日 自然医学会主催の自然農法研究会に、畠中、千賀子が参加。汚染されきった日本の

中で、真に人の健康を育てる食物をとりもどそうと、いろいろな努力をしている人々（土を正常な状態にもどすためには——）の心と植物の心の和から——の発表会がもたれました。

8月13日 かつての厚木振出塾の原さんが来訪。新しく出発して約半年、みんながんばっているそうです。前日女の赤ちゃんがお生まれになってニコニコ。

8月14日 第九期生バルカイにいた中村享子さん来訪。

8月15日 第八期生ギネガールグループの青木浩信さんが、第12回生の世話係として、再度イスラエルへ行って下さることに決定。連日、合宿の資料作りに協会へきて下さる。

8月16日 青梅市の多摩自然農場の阪本茂さんが来訪。消費者団体を通して、安定した生産、出荷が行われているとのことでした。おみやげにいただいた有精卵のおいしかったこと！

8月17日 八、九月合併号が刷りあがってくる。イスラエルの真夏の強烈さ、さわやかさが黄色い表紙の中に鮮やかにうかがいあがり、あまりの東京のむし暑さに、イスラエルへ避暑に行きたくなってくる。

8月19日 手塚さんが九州キブツ講演の旅へ出発。イスラエルのメギドウ地区と姉妹都市関係結び、毎年、青年の交流を行っている大山町と、長崎県庁でキブツ講演を行い、24日に帰京。真夏の暑さの中で旅の疲れもみせない、お元気な手塚さんでした。

8月23日 東山産業の研修より帰った千葉君、ひさしぶりに仕事にきてくれる。

8月24日 第12回キブツ研修生国内合宿が、今日より30日までみっちり行われる。世話係として、奥村、畠中、青木、それに先輩として中村享子、荒井京子さんが加わってくれる。八ヶ岳

にかこまれた、さわやかな高原の農場で、新聞、テレビ、雑事から解放され、朝は太陽とともに活動を始め、24名の仲間が集団生活をする中で、それぞれの人に、それぞれの部分において新しい発見が生まれたのではないでしようか。

8月24日 北試の研修を終えたマイケル君、日本の新しい、若い共同体をまわりたいと来訪。

8月26日 くる日もくる日も30度以上。たまに風鈴がチリンと鳴るだけ。暑い中で、千賀子がひとり留守番のかなり忙しい事務。焼けきったコンクリートは夜になってもさめず、夜明けの涼しさは訪れず、明け方はますます汗ばみ、いつたい、いつ寝むつたらいいのか？

8月27日 合宿第二日目に出て下さった宮部会長が、くわしい報告にみえた。

8月29日 手塚さん、研修生のまつ合宿へ出発。

編集後記

▽人生をまじめに生きたいと思う。その手がかりとしてキブツがあり、共同体を指向している訳だが……。

友人から宗教の話を書く時がある。彼はまっすぐ私の顔を見つめ、現代社会の矛盾を説き、我々は何をなすべきかを話す。私はその話に聞きはれ感嘆するのみである。しかし「入らないか」と言われると、私の心中には無意識的に反発力が起きるのである。

私がキブツの話をする時、果してどれだけ相手が聞きはれ感嘆してくれるだろうか。表面的には理解しているが、他人に理解してもらうことができない、自分自身、理解ができていないのだろう。また、私がその宗教に無意識的に反発したように、今の農業者にキブツの話

が理解できたとしても、同じ反発力が働くのではないかとも思う。今までの生活から新しい生活に入る時や、今までの考えから新しい考え方に移る時には、相当の決断力があるものだと思う。私には、キブツを知ってからこの協会に来るまで、そんな決断の気持ちがなく、来てしまいが、もう一度共同体とは何か、原点に振り返る必要を感じている。

マサオ

▽自然農場からいただいた有精卵。その黄味のあまりの鮮かさにびっくりする。黄色く、しつかり丸い。子供の頃、庭でいっしょに遊んでいた鶏が産んでくれた玉子を、御飯にかけて食べたことがなく思い出される。食べ終わったお茶わんに残っていた黄味の色も——。

今の玉子は、あわく、くずれやすく、ひよこさ生まれな。あまりにも変わってしまった食品の数々、名前だけが同じで中

味は別のものになってしまった。それは、人が研究し、人が作りだしたもの。今は、進歩という名において、ただただ新しいものをと作りだすだけ。生きていく人間、自分との調和を忘れさって。こうして、作られたものの中だけで生活していると、いずれどこかへ流され、本当のもの、自然なものがわからなくなってしまうのではないだろうか。目を閉じると、土と光が呼んでいる。まず、土の上へもどることだ。土を踏みしめた感覚と土を握りしめた心の中から物を生みだせば、大きな間違いはおかなくてすむのではないだろうか。

チカコ

▽秋のキブツ研修生の出発の時期が近づいた。今や研修生派遣の仕事は、当協会の主要な業務になっており、今後もこれは継続されて行くだろう。帰国した人達との連繫を真剣に考えねばならないと痛感している。久雄

unsuitable for Japanese conditions in Israeli kibbutz life. And let us hope that the Israelis will not fail to learn what they can from the best Japanese examples in this field, of which the Kensan-meeting methods of Yamagishi-kai can already be heartily recommended in many respects!